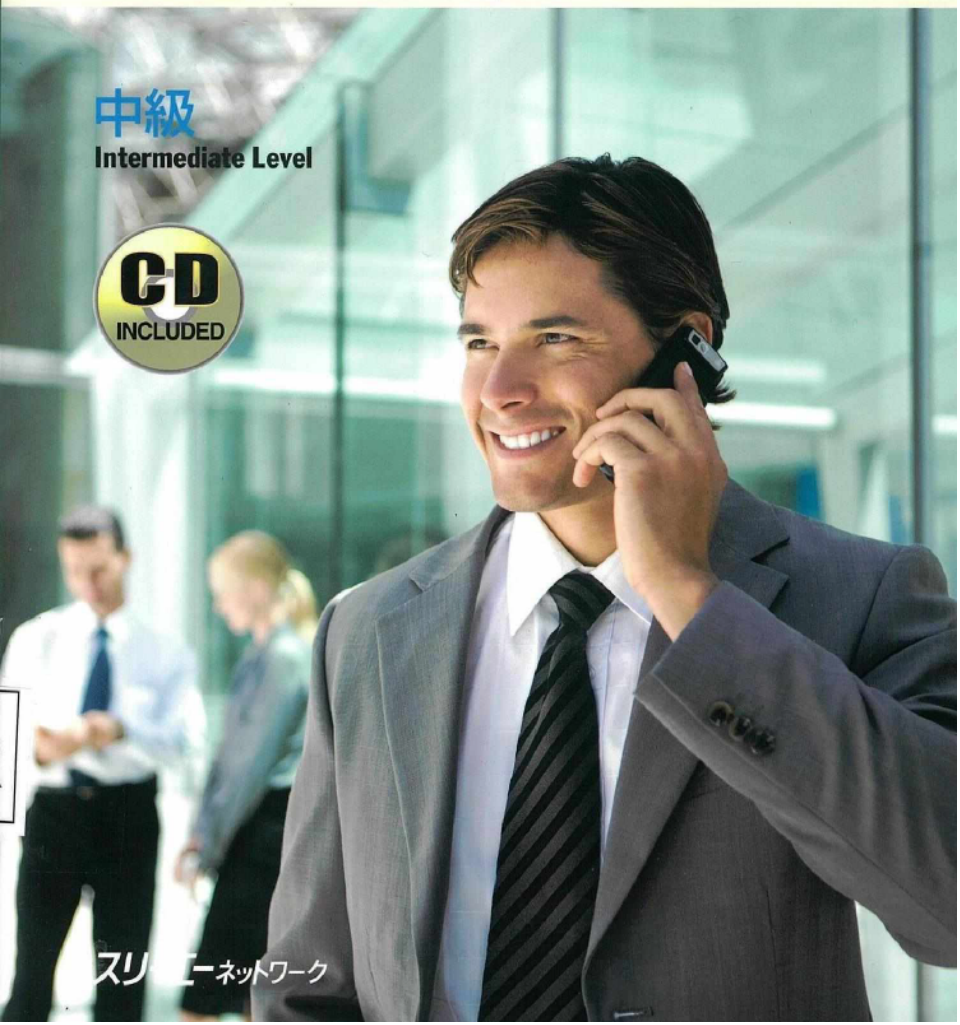
新装版
商談のための日本語

We Mean Business: Japanese for Business People

米田隆介・藤井和子・重野美枝・池田広子　共著

中級
Intermediate Level

CD INCLUDED



スリーエーネットワーク

Business

新装版

商談のための日本語

We Mean Business: Japanese for Business People

米田隆介・藤井和子・重野美枝・池田広子　共著

中級

Intermediate Level

©1996 by YONEDA Kyoko, FUJII Kazuko, SHIGENO Mie and IKEDA Hiroko

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the prior written permission of the publisher.

Published by 3A Corporation.
Trusty Kojimachi Bldg., 2F, 4, Kojimachi 3-Chome, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0083, Japan

ISBN978-4-88319-402-5 C 0081

First published 1996
Printed in Japan

はじめに

情報ネットワークが発達し、ビジネスに国境がなくなりつつある現在、日本語で商談をする外国人は確実に増え続けています。単に生活を円滑にするための日本語というのではなく、ビジネス現場でただちに使え、国際的にも難しいとされる日本人との交渉を可能にするような日本語の習得を求める学習者は近年目に見えて増加してきました。こうした背景を踏まえ、1996年6月からはジェトロによる外国人ビジネスマン向け日本語能力試験ともいうべきジェトロビジネス日本語能力テストも始まりました。

私たち4人は長年外国人ビジネスマンの日本語教育に携わった経験から、ビジネスの出発点である商談に焦点をあわせたビジネス日本語のテキストの必要性を痛感していました。また、ビジネス経験もなく、日本語教師としての経験も浅い教師であっても教えられる、教えやすいテキストでなければならないとも考えました。そうした現場のニーズから生まれてきたのが本書です。

各課は機能別に構成されており、最終的にプレゼンテーションのやり方が身につくようになっています。また、日本語で重要な「内」と「外」の言葉の使い分けを類型的に習得できるよう「社内」と「社外」の表現を対比させて提出しました。そこで用いられる表現は明らかに異なっており、ビジネス活動を行う場合にその表現差を無視するわけにはいきません。両者の違いを十分に把握し、使い分けることで、初めて適切なコミュニケーション活動ができるのです。この点を十分意識しながら、本書はSTAGE 1で「社内」と「社外」で用いられる基本的な機能表現を対比させて提出しました。(7課クレーム、8課プレゼンテーションを除く) STAGE 1で対比・提示されている機能表現は、数ある中から取捨選択し、それぞれの課の機能を最もよく代表していると思われる表現を取り上げてあります。この機能表現の選択には時間をかけ、慎重に検討し、さらに複数のビジネスマンの助言をいただきました。その結果、各課で必要最低限の機能表現をSTAGE 1に集約することができました。そしてより複雑なタスクをこなすのに必要な表現で重要なものはSTAGE 2にできるだけ提出しました。STAGE 3で、実際のビジネス場面に即したロールプレーを行うことで運用力を確かなものにし、STAGE 4では教室外での実践が行えるようになっています。STAGE 1からSTAGE 3まで、難易度順に提出してあるロールプレーをやっていけば、STAGE 4に提示されている複雑なタスクを達成する日本語能力が習得できるように構成されています。

本書はその原稿の段階で実際にクラスで使用し、修正してできあがったものですが、さらなる改良のために皆様方のご意見、ご感想をお聞かせください。

最後にこのテキストをまとめるにあたって、トライアルに協力していただき、貴重な御意見をお寄せくださった元ソニーランゲージラボラトリーの三嶋路子先生始め、各先生方に感謝の意を表したいと思います。また、出版に力を貸してくださった先生方や友人達、とりわけスリーエーネットワークの藤嵜政子さん、堤由子さん、萩原弘毅さん、英訳のチェックをしてくださったニコラス・J・マクニールさんに心よりお礼を申し上げます。

1996年10月

米田隆介
藤井和子
重野美枝
池田広子

このテキストを使う方へ

1．本書の構成とその特徴

本書は１課ごとに機能別に分かれており、各課はそれぞれ、***STAGE 1***、***STAGE 2***、***STAGE 3***、***STAGE 4***、の４つのセクションから成り、易しい表現から難しい表現へと無理なく日本語の力が伸ばせるように構成されている。

STAGE 1 は言語運用ができるように代入練習、ロールプレー、***STAGE 2*** は CD による聴解練習で、Q&A、機能表現の書き取り、そして応用運用力をつけるためのロールプレーを取り入れた。また、***STAGE 3*** は ***STAGE 1***、***STAGE 2*** で学んだことが総合的に練習できるような複雑なロールプレーを取り入れた。***STAGE 4*** はビジネスシミュレーションとして現場で実際に使われている表現に注意させるアクティビティーを入れた。

さらに、本書は実際のビジネスで使えることに重点を置いており、社内で使われる表現と、社外で使われる表現を区別して構成した。これは日本語の機能表現は場面によって使い分けをしなければならず、特に社内と社外では、表現方法が変わってくることが多く、またスピーチレベルも変わってくるからである。

なお、CD に収録されている部分は CD で表示した。

2．内容及び使い方

STAGE 1（基本的な機能表現が使いこなせるようになることが到達目標）

会　話　基本的な機能表現を含んだ短い会話である。CD を聞かせることにより耳から導入し、その後でポイントとなる表現を板書するなりして機能説明を行うとよい。未習の語彙があれば、合わせて導入する。機能表現および語彙の説明が終わったら、スムーズに言えるようになるまでリピート練習をさせる。ここで導入される表現は各課の基本となるものなので、この会話はできるだけ暗記させたほうがいいだろう。

練習１　会話で学習した機能表現を場面を変えて練習する代入練習である。この練習は表現の定着をはかるだけでなく、それぞれの表現が使用される場面の紹介も兼ねている。初めは教師が A、B どちらかを担当し、その後で学習者同士でやらせるとよい。（短い会話なので、プライベートレッスンの場合は１人２役でやらせてもよいだろう）このような代入練習の場合、どうしてもテキストを棒読みしがちであるが、これでは会話にならないので、話す時はテキストから目を離して、相手を見るように指導する。

練習 2　会話で学習した機能表現を、場面を設定したロールプレーを通して練習する。非常に単純なロールプレーであるが、状況から判断して使用する機能表現を選択していく ***STAGE 1～STAGE 3*** のロールプレー、そして ***STAGE 4*** のアクティビティーへとつながる第一歩となっている。ロールプレーのやり方に慣れていない学習者もいるので、初めは教師が手本を示したほうがいい。その際、練習 2 のロールプレーでは、必ず会話で学習した機能表現を用いるように指導しておくこと。初めに使用する機能表現を板書しておき、消してもきちんと言えるまで練習させるとよい。これを徹底しないと、いつまでたっても学習事項に関係なく勝手に会話を作る学習者が出てくるので注意が必要である。状況説明の文章を音読させる必要はないが、未習語などがある場合にはロールプレーを始める前に導入しておく。なお状況説明の前にある①②……は発話の順番を示している。練習 1 同様、初めは教師が A、B どちらかを担当し、その後で学習者同士でやらせるとよい。

ロールプレー　【社内】【社外】それぞれの終わりに会話で学習した機能表現を用いて練習できるように状況設定されたロールプレーがある。ここで用いる機能表現は順不同で並べられており、会話の番号とは必ずしも一致しない。それぞれのロールプレーがどの会話に相当するかは状況説明の文章から学習者に判断させる。どれに相当するか、ロールプレーを行う前に実際に質問してみるとよい。練習 2 同様、必ず会話で学習した機能表現を用いるということを確認しておく。また、ここに取り上げた場面以外にもそれぞれの学習者が遭遇しそうな場面があれば、教師が口頭で状況設定し、練習させるとよい。

STAGE 2 **（複雑な機能表現が場面に応じて使いこなせるようになることが到達目標）**

ここでは機能表現が、場面に応じて使いこなせるようにするために、表現の導入から運用までを四段階（1～4）の練習に分けて定着させるようにした。

STAGE 1 で取り上げなかった機能表現（複雑な表現及び語彙）を少し長い会話、またはねじれのある場面に取り入れた。

1．CD を聞かせることにより内容把握及び状況把握をさせる。ここでは談話レベルで内容を把握させることを目的とするため、細かい語彙や文法説明は避ける。正しく内容や状況が理解できていれば次の練習に進む。

2．CD を再度聞かせて内容、状況、機能表現、語彙等の確認をする。ここでは、機能表現の詳しい説明、語彙の使い方等を板書するなりして説明することで

学習者の理解を助ける。

3．1、2で学習した会話の機能表現を書かせて、会話を完成させることによって、機能表現が定着するようにする。下線部の初めに機能表現の説明が明記されているので、これをヒントにして、会話に合うような表現を書かせる。この表現は次で行うロールプレーで使うべき表現となっており、ロールプレーの準備段階となっているので正確に書かせる。ただし、これは暗記の練習ではないので、会話の状況に合った表現を書いていれば、CDの通りでなくてもよい。

4．3で書いた機能表現をCDの表現と比較することで、的確な表現を確認させる。

5．ロールプレー

1〜4で学習した機能表現が実際に運用できるように、ここではコントロールされたロールプレーを取り入れた。相手の情報もわかり、指示内容がかなり細かいため、ロールプレーの定義とずれる点もあるが、ここでは会話で学習した表現を運用させることに重点を置いた。この練習によって***STAGE 3***のロールプレーが無理なく達成できるように設定した。ここでも、学習事項に関係なく勝手に会話を作る学習者や、機能表現を使うことを意識しすぎて、混乱してしまう学習者が出てくるので注意する。どうしても機能表現がタイミングよく出てこない場合は、あらかじめ板書しておくとよい。

STAGE 3（実際に即したロールプレーでタスクがこなせるようになることが到達目標）

STAGE 1、***STAGE 2***で学んだ表現の使い方を総合的に練習し、実際のビジネス場面で使えるようにするために、ロールプレーによる運用練習を行う。ロールカードには役割や達成しなければならないタスク及びそのために必要な情報等が記されているが、学習者の創造力で情報を補う場合もある。学習者の自由な発想で発展させられる部分が多くなっているので、学習者のレベルに応じた発展が可能である。また学習者同士のロールプレーという形の練習だけでなく、教師が一方のロールを担当してみてもよい。その場合は学習者の自由な会話の発展はないが、教師のコントロールによって、学習した機能表現の使い方の実地訓練がより的確に行えることになる。

STAGE 3のロールプレーでは、ロールカードをコピーしてそれぞれの学習者に与える。各学習者に与えられる情報は各自のロールプレーカードに書かれている情報及び共通して与えられているグラフ等の情報であって、それらの情報を使って与えられたタスクを達成しなければならない。またお互いに、相手のロールカードに

ある情報は知らせないでロールプレーを行わせると、インフォメーションギャップが生じ、実際の言語活動に近づく。その際、教師は学習者が選んだ日本語の表現がその場面に適切なレベルか、また適当な機能表現を使用しているかどうかをチェックし、ロールプレー後のフィードバックに役立てるといい。こうしたロールプレーを授業で行う場合に「やらせっぱなし」になると、学習者の言語能力の向上にはならないので、必ずフィードバックの時間をとるようにすることが大切である。

STAGE 4 （ビジネスシミュレーション）

各課で学んだ機能表現がどのように使われているかを、現実のビジネス場面で観察させたり使用させたりして、教室でその結果を発表させる。

原則として各課の終わった後宿題にしておき、次の授業の冒頭で発表させる。

3．語彙の選択

脚注にとりあげた語彙は原則として中級後期レベルのものとビジネス表現を取り上げ、読み方及び英訳を付けた。

4．ルビについて

非漢字圏学習者に広く使われている漢字教材である「BASIC KANJI-BOOK VOL. 1, 2」（凡人社）で取り上げられているもの以外は、すべてにふりがなをつけて、学習者の漢字の負担を軽減してある。

5．授業の一例

各課に入る前に　各課の機能表現を使うときのワンポイントアドバイスや日本でのビジネスマナーなどを説明する。

STAGE 1

1)**会　話**
- CD で導入
- 状況、場面の把握
- 機能表現の説明
- リピート練習

2)**練習 1**
- 代入練習

3)**練習 2**
- A と B の役割確認
- 使用する機能表現の確認
- ロールプレー

4)**ロールプレー**（***STAGE 1***【社内】【社外】のまとめ）
- A と B の役割確認